

張 隆溪「危機に瀕する文学の読み」

Zhang Longxi, “Reading Literature as a Critical Problem”

鈴木 章能訳

Akiyoshi SUZUKI

言語芸術としての文学は、語句の意味を理解し、心ゆくまで味わうために書かれている。こうした考えが、強い批判的となることは、つい最近までなかったと思う。古の中国では、孔子が文学の力量を重んじ、自分の息子に「不學詩無以言也」¹（詩を学ばなければ、立派にもの言えない）と説いている。また、孟子が「説詩者、不以文害辭、不以辭害志、以意逆志、是爲得之」²（詩を解釈する際には、文字だけ取って詩句の意味を損なってはならないし、詩句だけ取って詩の言いたいことを誤ってはならない。詩の言いたいことの意を汲んで読むことができれば、詩を理解したといえるのだ）と言ったことはよく知られている。文学の大切さを論じ文学の読み方を手引く教示や指南は、太古の昔から数多ある。たとえば、清王朝の時代の学者、沈徳潜(Shen Deqian, 1673-1769)は文学の読み方について、様々な読み方や解釈の可能性がある
と領得し、「昔の人々の言葉には、無限の意味が宿っている。したがって、後世の者は、各々異なる気質—洞察力の深さや浅さ、気品の高さや低さなど—に従って、様々な反応を示す。これこそ、董仲舒(Dong Zhongshu)が『詩無達詁』（詩に唯一の解釈などない）と言った意味である」³と述べている。こうした中国の文学批評の伝統には、筆者が「解釈多元主義」と呼ぶような認識がある。「解釈多元主義」とは、「多様な読みが、文章を心ゆくまで味わった結果、言い換え

¹ 孔子『論語・季氏第十六』十三。劉寶楠(1791-1855)『論語正義』、『諸子集成』第一卷。(北京：中□, 1954), p. 363.

² 孟子『萬章章句上四』四。焦循(1763-1820)『孟子正義』、『諸子集成』第一卷, p. 377.

³ 沈徳潜『唐詩別裁』第四卷(北京：中□, 1964), 1:1.

れば、テキストの快樂の結果として生じる限り、自ら多様な読みを引き受ける」⁴ということである。このように読みの快樂に重点を置くと、西洋の批評におけるあの有名な著書、ロラン・バルトの『テキストの快樂』(1973)を思い出す者もいるだろう。あるいは、ピーター・ブルックスが語りの構造について論じた秀逸な研究書『プロットを読む』(1984)をはじめ、文学の読みを巡る数々の考察が頭に浮かぶかもしれない。

ところが、1960年代から90年代、あるいはそれ以降にかけて、文学を読むこと、とくに、心ゆくまで味わうことが、アメリカの大学を中心に、学問領域としての文学研究において難しい状況となった。このことについては、ロバート・オールターが1989年に出版した、その名も『イデオロギー時代における読みの快樂』という著書の中ですでに指摘している。オールター曰く、1960年代以降、批評理論や文学理論が影響力を持ち始めると、「多くの者が希望に満ち、知的興奮を覚えたようである」が、「その大きな期待感は畢竟、灰燼に帰してしまった」⁵。一番の失敗は「文学を専門とする多くの研究者が、読むことから背を向けてしまったことである」。読むことから背を向けた結果、批評家や大学の教師は、「文学に対し、輕蔑に近いような態度」⁶さえとるようになった。代わりに、学生は文学より理論を教えられる。そうした中、オールターは、大学院に通うある女子学生から、彼の比較文学の授業で『白鯨』を読んだとき、思いのほか楽しかったと言われたという。なんでも、彼女は「同じ専門領域に属する二人の英文学科の教授から、『白鯨』は退屈で読む価値などほとんどない作品であると前期の授業で言われていた」ようだ⁷。教員時代に体験したこのちょっとした出来事を「幻滅すべき時代の兆候」として回顧するオールターは、様々な批評的立場からの『白鯨』批判は認める。しかし、「正当な理由で『白鯨』を批判するのならまだしも、読むのがあまりにも退屈すぎるからと言って『白鯨』を全面否定する文学の教師は、コンピューターサイエンスを教えるとか保険を販売すると

⁴ Zhang Longxi, *The Tao and the Logos: Literary Hermeneutics, East and West* (Durham: Duke University Press, 1992), p. 197.

⁵ Robert Alter, *The Pleasure of Reading in an Ideological Age* (New York: Simon and Schuster, 1989), pp. 9-10.

⁶ *Ibid.*, pp. 10-11.

⁷ *Ibid.*, p. 12.

かでもした方がいい」⁸と、いささか皮肉を込めて言う。もちろん、コンピューターサイエンスを教えたり保険を販売したりするのが悪いと言っているわけではないし、文学だけが読むに値するものだと言い張るのは、教師のとるべき態度ではない。オールターの発言の要諦は、文学の研究者や大学で文学を教える者が、文学を読むことに何の興味も持っていないのであれば、職をまったく間違えているということである。

これに似たことを、筆者がかねてより敬慕する文学者、フランク・カーモードも言っている。彼は、多大な影響を残した『終わりの意識』(1967)で、文学理論、とくに、ナラティブ・フィクションの研究に大きく貢献した。しかし、2000年にカーモードは『シェイクスピアのことば』を発表し、その「序章」の中で、彼が嘆かわしいと考える現在の文学理論や批評の傾向を怒りにも似た語り口で非難し、シェイクスピアや文学という概念そのものに敵意をむき出しにする風潮に決別を告げた。「わたしが、とくに受け入れられないシェイクスピアへの見解がいくつかある」とカーモードは言う。

その中で最悪のものは、シェイクスピアの名声が、18世紀のナショナリスト、つまり、当時の帝国主義者の企てによって捏造されたという主張である。これに付随する、同じく先走った見解として、シェイクスピアを理解するには、彼の劇を、現時点で明らかになっている当時の政治的ディスコースに組み込まれたものとして考える必要があるというものもある。このように、シェイクスピアの面の皮を剥ぐことが、いまやシェイクスピア研究における関心事になっているのであるが、其の実は、常に人となにか異なることを言い続けるための拠り所として関心が集まっているにすぎないと見える。そうしたやり方は、シェイクスピアのことばより、研究者がたまたま面白いと思った話題について語っているのに等しい。たしかに、私が指摘するように、彼らはシェイクスピアのことばをほとんど引き合いに出さない。この新手の批評家の語調は過信に満ちている。彼らは、多くの先人た

⁸ Ibid., pp. 12-13.

ちが残した説について、その妥当性を巡る論議を概して望んでいないようである一方、自分の説の方を重んずることを求める。ジョンソン、キーツ、コールリッジの三人については、帝国主義的洗脳の被害者として扱わないと気が済まない。シェイクスピアを実際にはくだらないものというのなら、シェイクスピアの名声を捏造したという政治やその他のものもくだらないものとみなすのは理の当然である。もし、政治は尊重するというのであれば、彼らもまたブルジョワ的判断をそのまま受け入れているにすぎない。帰するところ、シェイクスピアを厄介払いするには、文学というまさにその概念をなくす以外にないだろう⁹。

要するに、カーモードは、文学作品を不要なものとみなして読むのをやめること、すなわち、彼の言葉を借りれば、「文学というまさにその概念をなくす」ことに反対するからこそ、偉大な作家の作品がもつ複雑さや特質を理解するための方法として、シェイクスピアの書いたことばを議論の俎上に乗せる必要があると言っているのである。

カーモードは 2001 年、カリフォルニア大学バークリー校でタナー・レクチャーを行い、そのときの話を 2004 年に小さな本にまとめて出版したが、彼が同レクチャーで選んだテーマは、文学の正典（キャンノン）と正典を読む楽しさであった。このテーマを選んだ理由は、正典の存在と正典を読むことの論理的根拠を明らかにする点にあった。別の言い方をすれば、「文学を真剣に読んでもらうために雇われているはずなのに、文学について多くを語らず、ときには文学というようなものなど実際には存在しないとまで言い、ジェンダーやコロニアリズムなど、新たな別のことを語る者が非常に多くなっている状況」について異を唱えることにあった。「そうした状況が喫緊の課題とみなされないのであれば、文学というものなどこの世にないと論じるのが有益であると思われる場合を除き、文学そのものを話題にするのはやめるべきである」¹⁰と、

⁹ Frank Kermode, *Shakespeare's Language* (London: Penguin, 2000), p. viii.

¹⁰ Frank Kermode with Geoffrey Hartman, John Guillory, and Carey Perloff, *Pleasure and Change: The Aesthetics of Canon*, ed. Robert Alter (Oxford: Oxford University Press, 2004), pp. 15-16.

そのときカーモードは主張した。この主張は、ロバート・オールターが読みの消失として書き示したこと、すなわち、文学を読むことを退屈に思い、文学を軽蔑的に扱う「文学の専門家」についての意見と似ている。続けてカーモードは、再び文学を読み、その審美的な価値を認めたいこうと提言し、読むという経験においては、快樂こそが偉大な文学の核心にあると論じた。

「たしかに、読みの快樂は、正典とされる文学作品の絶対条件ではないが、そうした文学作品には読みの快樂が経験できるものである」¹¹。しかし、文学を楽しんで読もうというカーモードの求めは、タナー・レクチャーの参加者からあまり共感を得られず、腑に落ちないという意見ばかりか、明確な拒否反応や反発もあった。とはいえ、いまのアメリカの大学における学問的情勢、とくに、正典や審美的快樂を快く受け入れたがらない文学理論や文化研究の盛んな状況では、驚くことでもない。

カーモードへの反論の端的な例は、ジョン・ギルロイの発言に見られる。ギルロイによれば、「文学の専門家」は今日、自分の研究領域が扱う対象について矛盾を感じており、その思いが二つの形式として現出している。「まず、文学作品を文学批評に欠かせない本質的なものとみなすことへの抵抗。もう一つは、文学作品の主要な存在理由が読みの快樂にあり、それと関連して、読みの快樂が少なくとも文学を批評する理由の一つであるとする見方への強い反発である」¹²。つまり、ギルロイに従えば、文学批評はもはや文学について語る必要はなく、批評家は現在、審美的な快樂について少しでも語れば「強い反発」を示すのである。それならば、批評家は何について語るというのか。ギルロイは、「今日の新しい文化批評家は、革新政治」について語り、携わるのであり、「文化的テキストとの出会いは、そこに表れている信念体系を確認し議論する機会となる」¹³と言う。すなわち、「文化的テキスト」とは、それが、ある「信念体系」を有する文章として見なされる限りにおいて役立つもので、文化批評家はその「信念体系」を政治的に解釈し、支持したり批判したりするのである。「文学作品」ではなく「文化的テキスト」

¹¹ Ibid., p. 20.

¹² Ibid., p. 65.

¹³ Ibid., p. 67.

という言葉に注意しよう。「革新政治」の旗のもとでは、文学作品の有益さは、歴史文章や資産報告書、メディア報道、映画、連続テレビドラマ、ビデオクリップをはじめ、ほかのあらゆるタイプのテキストとほとんど相違なく、それらは全て、「こちら側」か「あちら側」かの「信念体系」を表し得るものとなる。かつてフレデリック・ジェームソンは、「マルクス主義的解釈の枠組みの優位性」について論じ、ほかのあらゆる批評的アプローチや方法論を包括する乗り越え不可能な地平と述べた¹⁴。彼によれば、「<イデオロギー分析>」は「マルクス主義に固有の批評『方法』を示す、いまもなおふさわしい用語」であり、「政治的解釈」は、もろもろの解釈法の中の一つではなく、「あらゆる読解、あらゆる解釈の絶対的地平を形成する」¹⁵。ギルロイも同様に、政治こそが文学批評、あるいは文化批評における全てであり、また、そうあるべきという絶対的信念を持っている。言うまでもなく、このように政治を強調するのは目新しいことではない。1966年から76年までの中国文化大革命期において、政治は絶対的地位を占めた。政治が最優先され、ほかのものはすべて、「革命的政治」に仕える給仕役と見なされた。その結果、文学、教育、批評をはじめ、あらゆる知的活動が消失し、政治的な均一性がほかの全てにとって代わった。そうした近年の歴史における暗黒の時代を経験した中国人であれば、ギルロイの議論には妙に懐かしさを感じるし、その理屈っぽいスローガンも、そして、もちろん、その避け難い限界も知悉している。

ギルロイは、とくに詩を文学の「より高等な」形式と考えることに異議を唱える。「詩を芸術の代表例とするのは、あまりにも偏っている。<ポイエーシス>とは、人間の制作一般のことであり、日常生活のどこにでも認められるものであるのだから、受け入れがたい考え方である。したがって、審美的快楽を芸術作品とみなされるものに限定するのは、重大な哲学的誤謬である」¹⁶。ギルロイを代表とする文化批評では、文学は「特権的な」研究対象ではなく、また快楽は悉に相対的なものであって、文学作品を読んで得られる快楽は食事やセックスのような日

¹⁴ Fredric Jameson, *The Political Unconscious: Narrative as a Socially Symbolic Act* (Ithaca, NY: Cornell University Press, 1981), p. 10.

¹⁵ *Ibid.*, pp. 12, 17.

¹⁶ Kermode, *Pleasure and Change*, p. 70.

常の行為で得られる快樂と何ら変わらない。カーモードはタナー・レクチャーで質問者に対し、審美的快樂は文学を読むという経験にとって重要であり、それ以上に重要であるのは、文学批評の職に就く者の資格として、審美的感覺や文学の価値に対する真の情熱が欠かせないということであると論断した。「批評家はどのようにあるべきかという質問に対する私の現段階の答は、かなり前にウィリアム・エンプソンから拝借した言葉にある。すなわち、自分の想像力に資するものはどのようなものでも手にとってみればよいが、自分の嗅覚に従うべきである」。彼はワインの鑑識で用いられる言葉を例えて用いる。「この意味での直感をあらゆる者が持っているというわけではない。ここにはワイン学の寓意が含まれているが、いずれにせよ、そうした嗅覚がないのなら、別の職業を求めるべきである」¹⁷。そういえば、オールターも似たようなことを述べていた—文学に読む価値を見出せないのならば、「コンピューターサイエンスを教えるか保険を販売するとかでもした方がいい」。しかし、カーモードは、さらに続けて、旗幟鮮明な主張を展開する。

自分が信賴できる嗅覚をもたず、文学のようなものにはほとんど意味がないと言うのなら、その人物が文学について語るいかなるものも、文学を批評する方法として価値はまったくない。ある文学作品がたまたま頭に浮かぶきっかけとなったテーマについて色々なことを口にするかもしれないが、そうしたことは文学とは異なるテーマとしてふさわしいものであり、知識こそあれども関心など微塵もないテーマとは、ほとんど関係のないことである。そのテーマをいま「詩」と呼ぼう。そして、それが自分の頭のどこかにあるかどうか自身に問うてみたまえ—自分の頭のどこかに、本当にあるかどうかを。もし、ないのならば、なにか別のことをしていくことを勧める¹⁸。

¹⁷ Ibid., p. 85.

¹⁸ Ibid., pp. 85-86.

もちろん、文学作品にモラルや政治、イデオロギー的な意味を読むことはできる。しかし、文学を政治的な「信念体系」以外なにもない社会的な記録とすれば、文学や文学批評は跡形もなく消えてなくなる。たとえば、ミルトンの『失樂園』は、彼の急進的な信念体系と清教徒革命で演じた重要な役割から、失敗に終わったイギリス革命に関する偉大な詩として読めるし、実際にそう読まれてきた。ミルトンのこの偉大なる叙事詩についてきわめて造詣の深い著書を記したクリストファー・ヒルも、『失樂園』は「政治色がとても濃く、失敗に終わった革命の問題と常に格闘している」¹⁹と論じる。ヒルによれば、ミルトンが聖書にある人間の墮落の物語を用いたのは、イギリス革命の失敗を理解するためであった。「ミルトンにとって、人間の罪深さは、彼の時代になぜ最悪の事態が起きたのかを説明する。しかし、それだけではない。墮罪は希望を包蔵する。墮罪は、神がこの世に悪を創造したわけではないことの証拠である。それに、ミルトンの『失樂園』では、神が人間から自由を奪うことはない。人間は、全能の神の思し召しを受け入れなければならない。というのも、神の思し召しが物事の定めであるのだから。しかし、人間はいまなお準備を整え、次はもっとうまくいくように備えておかねばならないのだ」²⁰。『失樂園』は、ヒルが読めば歴史のアレゴリー、すなわち失敗に終わったイギリス革命のアレゴリーであると同時に、いつか勝利を収めることになる新たな革命への象徴的激励となる。17世紀のイギリス社会と政治について歴史的な知識が豊富に取り入れられたヒルの研究書は有益であり、説得力に満ちている。しかし、彼の読みだけがミルトンの唯一の読み方ではないし、そうであるはずもない。『失樂園』を単なるピューリタンの「信念体系」のアレゴリーとみなせば、その偉大なる作品がもつ豊かさを脆弱にしてしまうだろうし、イギリス文学の伝統においてミルトンの詩がもっている力と影響を説明することはできないであろう。ミルに見られるような知識と文学の感性さえない、政治的解釈だけに終始した批評となれば、これはもう不愉快な政治的洗脳の試みとほとんど変わらない。

¹⁹ Christopher Hill, *Milton and the English Revolution* (London: Faber and Faber, 1979), p. 362.

²⁰ *Ibid.*, p. 352.

カーモードは、政治が文学批評にとって代わるべきという考えをきっぱりと否定する。様々な快樂が相対化あるいは同一視されることについて、カーモードは、ギルロイには「深く考えさせる文学とそうでない文学との違いがわからないのである。深く考えさせる文学について論理的に説明するのがどれほど難しかろうと、そこには紛れもなくそう書いてあるのだ」と批判する。カーモードはまた、「審美的な快樂はセックスや食事や会話における快樂と何ら変わらない」と言う相対主義者の主張にも疑問を呈する。「私は会話やセックスや食事に何の悪い感情も抱いていない。しかし、そうしたことと偉大なる詩は異なるものであるはずだ」²¹。カーモードが述べることは実際、文学批評以外の領域では、ほとんど口にする価値もないように思われるほど、基本的かつ常識的すぎることである。どの学問領域も、研究対象の範囲によって定義されるのであろうし、ある領域の研究者は、当然、その領域の研究に特別な関心を持っていると思われる。言い換えれば、物理学者が物理現象に、化学者が化学反応に、コンピューターサイエンスを研究する者がコンピューターに何の興味ももっていなければ、おかしいことだろう。しかし、先に見たいいくつかの主張を思い出せば、文学を専門とする研究者の中には、文学を読むことに興味のない者が少なくともいるようである。

カーモードやオールターのような年長世代の研究者たちが文学の読みを重視するのは、彼らが今風の考えや理論を嫌っているためではない。読みの消失は、彼らより若い世代も含めて、アメリカの大学で文学を研究する多くの者たちも自覚し始めている。ホーン・ソーシーは数年前、アメリカ比較文学会のために書いた比較文学研究の現状報告の中で、次のように述べている。「いまや言語を専門とする学者であるために、多くの言語を知っている必要はない。ここ20～30年は、立証のために文学作品を引き合いに出さなくても文学研究で身を立てられることがあるようだ」²²。文学理論は次第に抽象的になり、テキストレベルから遠ざかるようになっていくし、批評家たちは、なぜ文学作品が読者に多くの快樂を与えるのかという分析がしづ

²¹ Kermode, *Pleasure and Change*, p. 88.

²² Haun Saussy, "Exquisite Cadavers Stitched from Fresh Nightmares: Of Memes, Hives, and Selfish Genes," in Saussy (ed.), *Comparative Literature in an Age of Globalization* (Baltimore: The Johns Hopkins University, 2006), p. 12.

らい状況にある。こうした情勢から、文学を楽しんで読むことがなぜいまの文学批評で喫緊の課題となるのか、とりわけ、比較文学がなぜアイデンティティの危機にあるのか、理解できる。比較文学は、ヨーロッパで生まれた批評理論の事実上の本拠地となってきた。しかし、ほかのすべての人文学と社会科学の領域も批評理論を用い始めたため、比較文学は文学を研究する学問としての基底を失い、アイデンティティを失っているのである。

先に触れたアメリカ比較文学会の報告書は、「文学性の言語学」—あるいは、単に「文学性」とも表わされる—について見直していこうと提言している。「たとえ、文学研究の扱う対象に文学とは無関係の方法論が好んで用いられる状況にあろうとも」、「文学性」について考えることで、「文学研究は活発であり続けるからである」²³。もっともな意見である。文学は、比較文学研究、そして文学研究全体が、学問領域として依って立つ基底なのだから。その基底を失えば、文学研究はアイデンティティの危機に陥り、破綻する。したがって、文学研究者は、文学へ回帰し、再び文学を読み、文学作品から撤退するのも、あらゆる理論からの解放を無邪気に喜ぶのでもなく、新たな文学研究の方法を見つけることが求められる。文学批評の必要性には、理論的根拠がある。文学は、単に表層に現れている部分だけのものではないからだ。文学への回帰とは、もちろん、文学批評を過去の時代に戻すという意味ではない。過去の時代にも、フォーマリズムやニュークリティシズムといった主観を排した批評理論はあった。理論のない真っ白な時代などどこにもない。回帰とは、単に過去へ戻るのではなく、弁証的転回のことである。ゆえに、文学への回帰が意味することは一つ、これまで何が明らかにされ、何が妥当ではなく、何が適切でないと考えられてきたのか、再考することである。それがどのような形のものであれ、重要な文学作品を読むことに重点が置かれるようになるはずだ。

カーモードが指摘するように、文学を読むときの快樂とは、単に楽しんだり満足したりすることではなく、哲学的な快樂のことである。それは、とくに、苦悩や苦痛の思いに関するものであることが多い。「優れた詩は、喜びと苦痛が巧みに縋い合わさっている。したがって、快樂

²³ Ibid., p. 17.

を語るだけでは不十分である。しかし、快樂、そして繰り返し失意に落ちたり歓喜に胸を躍らせたりできるという要素は、正典の資格として欠かせないものの一つである」²⁴。これこそが、哲学者や文学の批評家、理論家たちによって様々に論じられてきた文学の審美的快樂の特質である。アリストテレス曰く、模倣再現は人間の本能であり、「人間がほかの動物と異なる所以もここにある。人間はすべての種の中でもっとも模倣再現的である。したがって、模倣再現されたものを再認するのは人間の喜びである」。それゆえ、人間は「もっとも下等な動物や人間の死体の形状のように、その実物を見るのは苦痛であっても、それらをきわめて正確に描いた絵であれば、これを見るのを喜ぶのである」²⁵。喜びとともにある苦痛という、この相反するものの組み合わせは、中国の批評の伝統でも広く受け入れられている。錢鍾書(Qian Zhongshu)は、「詩の創造力は、喜びより苦痛の方がはるかに勝っているため、素晴らしい詩はもっぱら、怒りや悲しみや苦悩を表現する」と述べている²⁶。そして、唐朝の詩人、韓愈(Han Yu, 768-824)は、「歡愉之辭難工、而窮苦之言易好也」²⁷（歡喜の言葉を完璧に伝えることは難しいが、悲しみや悲哀の言葉は読む者を容易に喜ばせる）と述べ、「怨みごとを吐露する詩を巡るもっとも明確な定義」²⁸と錢は論じた。錢はまた、西洋文学から数多の例を引き、「耳にもっとも美しく響く詩は、もっとも悲しい思いを語ったものである」とも言う。彼が引用するシェリーの「ひばりに寄す」にある有名な詩句がその端的な例であろう。その錢は、悲哀を表現する文学について『悲劇的文芸史』という壮大な研究書をまとめたドイツ文学者のヴァルター・ムシュクに関し、「彼が昔の中国人の議論をまったく知らないのは残念だ」²⁹と真情を吐露する。約まるところ、読みの地平を広げること、そして、真に開かれた意味での世界文学に出会うことが、このグローバリズム時代の文学研究にとって最も望ましい展望をもたらすのではないだろうか。危

²⁴ Kermode, *Pleasure and Change*, pp. 28, 30.

²⁵ Aristotle, *Poetics* 48b, trans. Stephen Halliwell, in Aristotle *Poetics*, Longinus, *On the Sublime*, and Demetrius, *On Style* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1995), pp. 37-39.

²⁶ 錢鍾書『七綴集』(上海: 上海古籍, 1985), p. 102.

²⁷ 韓愈『韓昌黎全集』(北京: 中国書店, 1991), p. 291.

²⁸ 錢鍾書『七綴集』, p. 108.

²⁹ *Ibid.*, p. 110.

機に瀕する文学の読みという問題は、まさに文学を読むことによって解決されうるであろう。そして、文学研究のこれからは、東洋と西洋の各々異なる文学の伝統に属する偉大な作品を読むことにかかっているのだと思う。世界の偉大な文学作品に回帰し、審美的経験という読みの快楽、ならびに、深みのある思弁と批判的知性による知的快楽をバランスよく保つことで、文学研究が再び活発化していくことを期待している。

本論は、2010年9月に広東外語外貿大学で開催された国際学会“International Conference on Literature Reading and Research: Cross-Cultural Perspectives”における張隆溪博士(Dr. Zhang Longxi)の講演論文の翻訳である。張博士は北京大学で修士号、ハーバード大学で博士号を取得後、ハーバード大学、カリフォルニア大学を経て、現在は香港城市大学(City University of Hong Kong)で比較文学ならびに翻訳論の主任教授を務めている。スウェーデン王立アカデミー外国人会員、国際比較文学会評議会委員、*New Literary History* の編集顧問でもある。著書に、*The Tao and the Logos: Literary Hermeneutics, East and West* (Durham: Duke University Press, 1992), *Mighty Opposites: From Dichotomies to Differences in the Comparative Study of China* (Stanford: Stanford University Press, 1998), *Out of the Cultural Ghetto* (Hong Kong: Commercial Press, 2000); 『走出文化的封閉圈』(中国語版) Beijing: Joint Publishing Co., 2004), *Allegoresis: Reading Canonical Literature East and West* (Ithaca: Cornell University Press, 2005), *Unexpected Affinities: Reading across Cultures* (Toronto: University of Toronto Press, 2007), 『比較文學研究入門』*An Introduction to Comparative Literature* (中国語) (Shanghai: Fudan University Press, 2009), 『靈魂的史詩□失樂園』*A Spiritual Epic: Paradise Lost* (中国語) (Taipei: Net and Books, 2010)がある。

張博士が以前勤務していたカリフォルニア大学と言えば、ヒリス・ミラー、ジャック・デリダ、ジュディス・バトラー、スティーヴン・グリーンブラット、ヴォルフガング・イーザー(客

員教授)等々、批評理論や文化研究における第一人者たちの名前が思い浮かぶ。張博士も、彼らとともに教鞭をとっていたのだが、しかし、博士は「彼らの文学観からは距離を置いていた」と言う。たとえば、*The Tao and the Logos* では、エズラ・パウンドの詩の脱構築は漢字に通曉しないからこそできる牽強附会の議論であると論断する。張博士は欧米の理論の流行に流されない。その揺るぎなさには造詣深い学問的裏付けがある。張博士は、長年に渡って議論が積み上げられてきた自国、中国の文学研究の書を渉猟し、いわゆる批評理論が取り上げるテーマのいくつかはすでに議論が尽くされていること、ならびに、欧米の理論だけがすべての文学を常に扱えるわけではないことを知っている。だからこそ、逆に、いまだ乗り越えられていない課題を解く鍵となる有益な欧米の理論まで否定することはない。まさに、「自分の直感(嗅覚)に従え」の実践である。

したがって、張博士が本論で問題とするのは理論それ自体ではない。問題は、文学が読まれないという実情である。とはいえ、何人も文学を何にもまして読むべきであると主張しているわけではない。それは「教師のとるべき態度ではない」。そうではなく、文学も読もうということであり、少なくとも文学の専門家は文学作品を読もうということである。文学が基底とならない研究は文学研究にはなり得ないのだから。本論にある理論への批判は、そうしたことに付随して生じている。だから、その批判は「今風の考えや理論を嫌っているためではない」。第一、「理論のない真っ白な時代などどこにもない」。

「文学作品にモラルや政治、イデオロギー的な意味を読むことはできる」。それは、文学の読みが本来的に「多元」的に成立するものだからである。したがって、文学作品がモラルしか、あるいは政治しか、あるいはイデオロギーしか含まないとみなすことは、文学の有する「多元」性に背を向け、言い換えれば、文学を読まずして、文学以外の関心ごとに眼を向けていることになる。このとき、理論は特権的地位を占め、文学は理論の「給仕役」となる。しかし、理論が特権的な地位を占めるとき、観念ではなく身体のリアリティとして、なにがおこるのか。政治が絶対的優位に立った文化大革命期の経験をもつ張博士の言葉には重みがある。

(*Allegoresis: Reading Canonical Literature East and West* も参照のこと)。

文学は逆に、そうした硬直性を打破するためにはなかったのだろうか。そして、広い意味で文学は、読み、解釈し、新たな知見に達し、もの申していくという学ではなかったのだろうか。だからこそ、「このクラス」から「テキスト」を奪った理論から文学を取り戻し、かつ、特権的な単一の理論からではなく、「自分の嗅覚に従って」、五感のすべてを用いて、文学のことばが多元的に読まれなくてはならない。そう張博士は考える。

実際、ここに来て、文学の読みへの回帰が次第に叫ばれるようになっていく。先に、ヒリス・ミラー博士の名前に触れたが、ミラー博士と言え、批評理論の第一人者として知られている。しかし、そのミラー博士も数年前に出版した『文学の読み方』(*On Literature*)の中で、読みへの回帰を提唱している。実は、広東外語外貿大学で開催された国際学会には、ミラー博士も招待されていた。張博士の講演の後、最初に手をあげて意見を述べたのは、だれだろう、ミラー博士であった。そのとき、ミラー博士の口から出た最初の言葉は、「あなたの言うことに全面的に賛成する」というものであったことをここに付言しておこう。

訳者もまた、広東外語外貿大学での国際学会に招待され、毎日、張博士やミラー博士と朝食から夕食までご一緒させていただいた。帰国後は、ICレコーダーで録音させてもらったお二人の講演やみんなで語ったホテルでの文学談義を繰り返し聞いた。中国の旧正月の初日、張博士に新年の挨拶をメールで送ったとき、講演を翻訳したいと申し出たところ、30分もしないうちに、快諾の返信がきた。そのとき、講演原稿まで送っていただいたばかりか、本論にある中国の文学批評について多くの教示までいただいた。この場を借りて、張博士の温かいご配慮に心より御礼申し上げたい。なお、最後になったが、本論で用いた『政治的無意識』の訳は、平凡社ライブラリー版にお世話になったことをお断りしておく。